

出かけて  
みました

## 驚きのキューバ医療視察旅行

杉山秀子（会員）

2015年3月、私はお医者さんたちのグループに便乗させてもらってカナダ経由の飛行機でハバナに降り立った。一行は

医療施設、養老院、医科大学、

中高校、障害者施設などをくま

なく視察させてもらった。これ

を書くのは、昨年末、フィデル・

カストロが90歳で大往生したた

めに彼の偉業を忘れないうちに

書きとどめたかったからである。

この国でまず驚いたことは、

人びとは社会主義国家であるに

もかわらず、マルクスレーニ

ン主義思想を一切教育されない

ことである。最初、え？まさ

かと思ったが、ほんとにそうい

う七面倒な学習を一切しないそ

うだ。弱い人、困っている人を

お互いに目をかけながら助け合

うということが人間としての最

低の義務ということが教育や医  
療の底辺で教えられることだそ  
うだ。

ここでキューバの歴史を簡単  
にふりかえってみよう。

20世紀初めから、バティスタ

政権崩壊までアメリカはキュー

バの政治を実質的に支配し、製

糖業などの主要産業を支配した。

カストロは1953年7月、

弟のラウルやチェ・ゲバラなど

130名の仲間とキューバ東部

で蜂起し、1959年1月バティ

スタ政権を倒し勝利した。62年

にはキューバに核兵器を持ち込

みたいソ連とアメリカが対立戦

争の危機が生じたキューバ危機

が発生したが、カストロは76年

まで国家評議会議長としてキュー

バに君臨、この間アメリカから

経済制裁を受け続けた。91年ソ

連崩壊後、亡命する人が後を絶  
たなかった。カストロは「革命  
が嫌な者は去るがいい」と容認  
した。

カストロは1995年と20

03年2度訪日、03年には広島

を訪れ、被爆死亡者の慰霊をし

たという。カストロは、201

6年12月惜しくも死去、その残

された手紙が開示されたが、そ

の手紙には、自分の死後、決し

て銅像を作ったり、個人崇拜を

するなという文面であったそう

である。その故人の遺志を尊重

し、チェ・ゲバラの広場にもカ

ストロの遺影も銅像も立ってい

ないそうである。

キューバはカリブ海最大の島

国で、面積は日本の本州の半分

にあたる約1万922km<sup>2</sup>、人口

は1121万人である。言語は

スペイン語。気候は亜熱帯海洋  
性気候で、年間平均気温は26度  
前後だが、9、10月はハリケー  
ン・シーズンになっている。キュー  
バといえば有機栽培の農作物で  
有名であるが、わざわざ有機栽  
培をしているのではないのだ。  
金がないから除草剤やケミカル  
の薬剤を使用しないでそのまま  
好きなようにならせているとい  
うことのようなのだ。

1959年の革命以降、予防  
医療に積極的に取り組み、母子  
保健や高齢者事業およびワクチ  
ン接種による疾病予防を徹底し、  
乳幼児死亡率4・2%、平均寿  
命79歳、医学校24、医師7万6  
506名（医師1人当たり住民  
147人）、歯科医師数1万2  
144名（歯科医師1人当たり  
住民925人）、病院152、  
ポリクリニック451、ファミ  
リドクター診療所1万148  
6、薬局2117、血液銀行26  
など中南米諸国の中では医療先  
進国に位置づけられている。キュー  
バ国民の医療費は無料であるが、  
外国人は適時支払いを請求され

る。

キューバの保健医療政策には、国際的な、外交政策としての面と、国内的な、国民の医療保障制度（メディケア）の面の2種類にわけられる。革命家としてのフィデル・カストロはこの両面で歴史的な成功を収めたが、この偉業が米国による過酷な長期にわたる経済制裁、貿易封鎖の状況下に成し遂げられたことは瞠目すべき事実である。フィデル・カストロの革命政府が実権を握ったのは1959年1月で、当時キューバにいた約6000人の医者半数は国外（主にマイアミ）に逃亡、深刻な医師不足状態になった。さらに60年5月22日、南米チリで巨大地震が発生して、国の内外で大きな被害が生じた。

しかしながら、カストロはすぐにチリに有力な救援医療団を派遣し、また、63年には、フランスの植民地政策の圧政から独立したばかりのアルジェリアにその医療制度の整備を援助する医師団を送りだしている。これ

らの事実から、当時アメリカなどから、医療技術を外交の手段とする狡猾な下心ある手法だと勘繰られたが、それこそ上司の勘繰りというものだ。

医は仁術という言葉がある。困ったところに手を差し伸べるということとは、カストロの革命的思想の内奥から出てきた偽らざる本心であったことは、これらの事実やその後のキューバの医療がいかに弱者を庇護したかを見れば如実にわかる。

極端な話が、カストロの盟友でキューバ革命に尽力したチェ・ゲバラを暗殺した反革命軍の隊員が白内障にかかって困ったときも、キューバに招いてその治療に尽力したのである。盟友のいわば敵である人物に対してもこのような人道的立場から光をあたえてやったという。

その後86年のチェルノブイリ原発事故で被曝した総計2万6000人の患者（主に子どもたち）を、キューバはババナの海浜近くの療養所に受け入れて転地療養をさせたこともある。

ハリケーン・カトリーナ災害以後、カストロ政府はヘンリー・リーヴ旅団という名の数千名の隊員からなる海外災害救援医療派遣隊を創設して、これまで12回の海外派遣を行っている。その最大の派遣は2005年のパキスタン大地震で、2250名の大救援隊が現地に入り救援に目覚ましい尽力をした。

また、もっとも顕著だったのは、ハイチに対して行われた長期に渡る持続的な救援活動だ。10年1月のハイチ大地震とそれに続くコレラ蔓延では、キューバからの救援の迅速さと規模の大きさが周辺の国々を驚愕させた。医者たちはそのままハイチに残って貧民層の医療に尽くしその土地の医師として活躍した。

医師養成専門機関としては、キューバは1999年、ELAMーラテン・アメリカ医学校という名の収容学生数で世界最大の医科大学を首都ハバナに開設した。これまでの入学学生総数は2万を超え、6年の修学を終えた医師数は1万人以上、キュー

バ以外の中南米、アフリカ、アジアの110か国からの青年たちで、授業料ゼロ、教科書フリー、一人前になったら、それぞれの国で医者として働くことが期待されている。

今回の視察旅行で、特に感心したのはキューバの医療技術政策が単なる医療にとどまらないことだ。例えば白内障治療は白内障を中心とする眼科手術の大大小小的の施行の事業として位置づけられていることと同時に大々的な識字運動とも結びつけられ、医療のみならず、社会的文化的な力の向上にも結び付けられていることである。

これは、2004年、キューバが自国を含む中南米諸国を主な対象にして、識字能力向上プログラムを推進しようとした時、その大きな障害が白内障その他の視力障害であることに気付いたことが事の始まりであった。以来今日までに、34か国、200万人以上の人々がキューバの眼科専門医による白内障や緑内障の手術を無料で受けて、読み

書きの能力を獲得できたときれいている。

さて、実際に医療活動がキューバでどのように行われているかといえば、際立った特徴は「ファミリードクター制」をとって地域医療の軸にしていることである。キューバの医師の数は10万人当たり681人で日本の3倍である。全国1万3300か所の地域診療所に勤務するファミリードクターがあり、全患者の80%に対応し、地域住民の健康に責任を持っている。ファミリードクターが一元的に患者を管理し大きな病院に転院してもこのカルテが使われる。

我々は実際に団地を訪問し、各団地の中にある診療所を見学し、医師の各家庭の構成員の疾患記録や、健康状態、その一家の遺伝的特質と疾患の歴史などが克明に手書きで書かれたドクターの記録ノートを見せてもらった。ドクターが3世代位のファミリーの健康記録を把握し、お互いに隣人として信頼し合い、アドバイスを受け治療も選択でき

るのである。日本と比較して何という手作りのぬくもりのある診療であるかと感じた。

診療形態はファミリードクターが一元的に管理し大きな病院に転院してもこのカルテが使われる。病状が重い場合は地域病院が治療を行い、高度医療は総合病院で行うという形をとっているという。ファミリードクターが心がけていることは常に病状が重くならないように予防医療を心掛けていくということだ。さらに養老院でも手厚い介護を受けている模様だ。

その例として、キューバ在住の数少ない日本人の例、最後の日系1世津島三一郎さん（105歳）の話が日本のテレビにも紹介された。残念ながら津島さんは2016年6月に106歳で亡くなられている。養老院の1か月の費用は40ペソ、およそ200円だったそうである。これは老人年金（250ペソ）の6分の1である。津島さんは生涯独身でキューバに住み着き、手厚い看護を受け1日20本の喫

煙も許され、安らかな老後を送った模様だ。

社会主義国キューバでは、医療行為で儲かるシステムになっていない。患者が減ることがすべての人にとって幸せなのだという。筆者は何処までもキューバに貫かれたカストロの崇高な精神を垣間見たような気がした。いいことづくめのようだが、

困る事もある。アフリカやラテンアメリカなどに若き医師の医療隊を派遣すると必ずのようにラブロマンスが生まれ、貴重なキューバの財産である医者が現地人と結婚して戻ってこないことがある。しかしキューバではいちいちそれをとがめることなく、おおらかに処しているようだ。ラテンの気質だから医者も燃えやすいのか、もう半世紀前の話だが、モスクワ大学に留学していたキューバ人がロシア女性とのロマンスが高じて学業がおろそかになったり、戻りたがらないケースが生じ、カストロの弟のラウル・カストロがモスクワに乗り込み「お前ら、なん

のために優雅にモスクワくんだりまで送られて遊学させてもらってるんだ、国をとるか、女をとるか」と直談判したことは有名な話である。

とにかくキューバ人は優しい氣質で女性に優しいからモスクワっ子もぞっこんということになったのであろう。またあまり、小さいことに拘らず、屈託がない。日本人のようにきりきり勤勉に働くこともしない。のんびりナットクのいくように働く。女性と男性の差別はなく、国会議員の数も男性と変わらないくらいいる。議会に占める女性の議員数は北欧の国々の議員に劣らず、世界で第4位である。

医学大学の学長は女性学長、小中学校の校長も女性が多く、男性と変わらず胸を張って堂々と演説する。医療の水準の高さと女性差別のない国ということですから筆者は惹きつけられませんでしたのである。